別紙２

審査の結果の要旨

論文提出者氏名　安田震一(ヤスダ・シンイチ）[ウィリアム･シャング]

『中国近代史と歴史画：その機能と史料的価値』と題する本論文の主な目的は、18-19 世紀に中国をモチーフとして描かれた歴史画を系統化し、美術史学に組み入れること及び歴史（中国近代史）研究において信憑性のある史料として位置づけることである。欧米では、これまでは歴史画を商業主義目的（ロー・アート）で描かれたとして扱ってきた。画家及び作品群を広東派（Canton School）に属すると位置づけながらも、未だに本格的な研究分野としては確立していない。その理由は、モノとして、または生活の一部に使われたことからその社会性が評価され、美術品として認識の妨げになっている。これまでの研究で明らかになったことは歴史画の構図は、ヨーロッパ人画家によって描かれた作品及び中国人画家が西洋人のために中国を多様な側面から紹介した作品であると言える。ヨーロッパ人の作品は本国では、さほど評価されず、中国人画家の作品も中国では評価されることはなかった。その意味からも 18-19 世紀当時は、注目されることはなかった。本論文は、それらについて、歴史を語る目で見る史料であることを画像と背景説明によって分析した独創的な研究である。

いったいに歴史画は、東西文化交流の枠組みで考察する必要がある。安田氏の論文は、ヨーロッパ及び中国の歴史画に限定して述べているが、本来は東南アジア、インド、オセアニア、アメリカ大陸、中東など広い地域を検証するための史料になりうることを明らかにした。しかし、地域及び時代背景によってこれまでオリエンタリズム、植民地主義の継承、作品が大量生産されたこともありツーリスト･アートとして捉えられることもあった。しかし氏は、この見解に賛成せず、政治的あるいは地域的な枠組みが異なり、最も大きな要素として中国人画家達の市場が確立していたため必ずしもオリエンタリストの作品だと特定できないと論じたのである。さらに、ピクチャレスクまたはリアリズムの傾向を考慮し、画風から考察しても、歴史画の場合は日常または歴史的出来事の記録であると結論づけるべきだというのが氏の所見である。

本論文は、「まえがき」、「研究史」そして第一章において、西洋絵画と中国絵画が互いに直接影響を及ぼした作品が存在しないため、歴史画が学問的分野として確立されなかったと考え、美術史学及び歴史学から研究史料として認められない経緯について述べている。歴史画が描かれた時代は、ヨーロッパ諸国の植民地主義が横行し、そしてとりわけアジアを描いた作品をそうした時代背景及び当時の外交･政治的な傾向を含めて考察を行えば、画像史料の中でも連続性または非連続性が理解できることに氏は着目したのである。

とくに第一章では、模倣作品が多いことに関連し、利益目的で描かれ、土産作品であると言われるツーリスト・アートと歴史画を区分している。中国をモチーフとした歴史画は、特にこれまでは曖昧に扱われてきたと言え、様々な視点から考察することによって新たな解釈ができるのではないかと考えたのである。

第二章は、中国の歴史画の原点とも言えるマカートニー使節団に随行した画家ウィリアム・アレグザンダー（William Alexander, 1767-1816）の肖像画及び風景画を中心に考察している。アレグザンダーは 18 世紀末、中国の内陸部に足を踏み入れた唯一の西洋人画家であったため、彼の作品は当時の史料としては、貴重かつ最もアップデートされた情報であった。アレグザンダーが「見たまま」の様子を記録したため、今日アレグザンダーの作品は「目で見る中国の歴史」であると評価できると氏は評価している。

第三章では、アレグザンダーと同時期にジェームス・クックの太平洋学術調査団に随行したジョン・ウェバー、インド及び中国の広東省を訪れたトーマス及びウィリアム・ダニエルらも 18 世紀中国の素顔を捉えた初期の画家達などについても考察しながら互いにいかなる影響を及ぼしあったのかを考察している。

第四章では、中国に関連する歴史画を情報収集のために 1790 年代に描かれた記録画が 1820 年代以降、西洋人貿易商人の往来が活発化するにつれ、作品の形態に変化が見られるようになったことを明らかにしている。

第五章では、職貢図のような画像史料は、ヨーロッパ諸国に持ち帰られているが、それらが直接影響を及ぼしたことを立証する記録はない反面、職貢図に見られる画像が、ヨーロッパのコレクション、例えば 18 世紀の肖像画を集めた Mottahedeh Collection, Peabody Essex Museum さらには歴史画を専門に扱っている Martyn Gregory Gallery などで確認できることを考察している。

以上の知見と手続きによって安田氏は、中国をモチーフとして描かれた歴史画について、研究が始められた初期の時代、すなわち 1970 年代に出版された史料を再考し、西洋で見ら

れた一方的見解を改める必要があることを氏は明らかにした。まず「モノ」ではなく、西洋と中国の土壌によって作られた、あるいは双方の文化を超越したハイブリッド画(混合画)として認識する重要性と必要性を実証とともに明らかにした。また、英文学及びアメリカ学の視点から、これまで「中国人画家の手によって描かれたとは思えないほど詳細かつ鮮明である」、「欧米でも、これほどの作品を描ける画家は稀である」などの記述がなされてきたが、こうした傾向に注意する必要があることを氏はさりげなくかつ説得的に述べている。今後の漢文史料に基づいて画家の実名及び描かれた背景の事実確認が行えるような研究にとっても、本論文は大きな出発点となることを期待したい。

本論文は、問題の中立的なアプローチと禁欲的な叙述を心がけるために、氏の得意な中国語や英語でなく日本語で書かれた。この点をまず多としたい。その反面、表現には日本語としてぎごちない面も見られ、審査委員から随時指摘もなされた。また、英文資料や外国人名の日本語訳や日本語表記にも慣用とは違う表現がまま見られた。しかしながら、中国と欧米の地域研究を横断し、美学・美術史の分野の蓄積にも射程を延ばした本論文は地域文化研究の可能性に新たな領野をもたらした点を高く評価したい。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。